

運動会は一生の宝物

「走れば転ぶし、投げれば届かん。私はあなたの運動会に行くのが本当におっくうだった。今でも母は私にこう言う。」

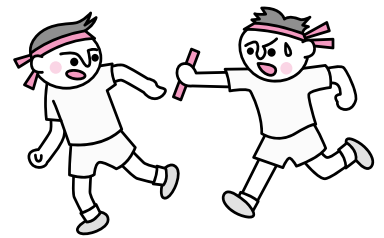
幼いころ、確かに私は運動オンチだった。的を狙ってボールを投げても、ヒョロヒョロ球は届きもしない。クラス対抗リレーでは、バトンをもらうまではトップだったのに、全員に抜かれてドベになった。自分自身とてもシヨックで、今でもその時の事はよく憶えている。

しかし、運動会は大好きだった。

た。校庭いっぱい立ち並ぶテント、白く鮮やかに描かれたトラック、皆の歓声と太鼓の音。スタートラインでの緊張感、合図と同時に走り出す時の弾けるような感触。

「学校で何が一番楽しい？」と聞かれると、いつも迷わず「運動会」と答えていた。

運動オンチはいつの間にか解消され、卒業する頃にはクラス代表のリレー選手になった。大好きだった騎馬戦では負けたことがない。



小学校の運動会。

今、私たちは親として参加している。無邪気な子供たちの姿に、かつての自分自身を重ねて眺めていたのは、私だけではないはずだ。当時と変わらぬ汗と埃のにおいに、さまざまな記憶が甦る。

昔と比べると学校を取り巻く環境は、大きく変化したと言われている。しかし、子どもたちは、何も変わっていない。変わったのは私たち大人だ。子どもたちに何を与えたいのか、その答は私たちの思い出の中にある。

今日の思い出が、子どもたちの一生の宝物になつたければと願う。そして、もっと多くの思い出のために、私たち大人はもっと汗を流さなくてはならない。

下羽栗小学校PTA

副会長 田中勝士



教育委員会
だより

一人ひとりを大切に

後進国 発展途上国

「あらぬ噂、他人からの悪口、陰口」これは「人権に関する県民意識調査」で人権侵害を感じたことのうち最も多かったものです。人は誰かとコミュニケーションを図り、友情や信頼を芽生えさせていきます。そのコミュニケーションの一つとして使われる「言葉」が時として知らないうちに他人を傷つけるとしたら…。

後進国 発展途上国 生活の中で、なにげなく子どもの前で使っています。子どもは学校で差別や偏見についての教育をしっかりと受けており、感受性が強いので、敏感に感じ取ります。ふだん使っている言葉から、差別心や偏見が無意識のうちに刷り込まれ、習慣化し、日常化していくことは大人の責任において避けたいことです。

「差別表現」についての「言い換え集」を作成しました。不快な感じを与える言葉や表現を使うべきではないことは当然で、私たちの日常においてもこのことは大切なことです。一例を紹介します。

一人ひとりを大切にすることは、難しいことではありません。私たちがよりよく生き合うためには、ほんの少し気配りの心を高めればよいのです。点字ブロックの上には自転車を置かないとか、身体障害者用の駐車場に身勝手に車を止めないとかは出来ることなのです。

めくら 目の不自由な人
かたわ(不具) 身体障害者
盲目 溺愛 土方 土木作業員
らい病 ハンセン病 足がない
交通手段がない 父兄
席 保護者席 バカチョンカメラ 全自動カメラ

家族の会話や親しい人との話の中で「あれ、それっておかしい言い方じゃないかな。」と思った時こそ、さあ、あなたの人権感覚を生かしましょう。